

戦争体験アーカイブ事業

「次世代に伝えたい

あなたの戦争体験」



日野市は令和3年度、国立市・多摩市と連携し、三市で戦争体験談の募集、保存、活用を行う「戦争体験アーカイブ事業」を実施しました。

「次世代に伝えたいあなたの戦争体験」として皆さまから日野市にお寄せいただいた体験談を、ここにご紹介いたします。

平和は市民生活の基本であるという理念は、いつの時代でも変わることがありません。体験者の方々の感じたこと、心のうごき、そして次世代へつながる平和への想いを体感していただければ幸いです。

戦争体験アーカイブ事業 戦争体験記

《 目 次 》

● 渡 邊	俊 治……『戦争体験談』……………	1
● 三 浦	秀 夫……『私の戦争体験』……………	5
● 鈴 木	和 夫……『沢井の軍需工場』……………	7
● 宮 部	栄 子……『焦土に立つ』……………	9
● 鈴 木	順 子……『昭和20年の記憶』……………	13
● 中 村	壽 美 子……『戦中戦後の私』……………	15
● 町 田	典 子……『私は忘れない』……………	19
● 田 中	貞 子……『戦時中、私は五校の小学校を体験した』……………	23
● 上 原	久 巳……『百年後のあなたに!』……………	27

●久保田	晴子……『戦争と地震』……………	29
●中村	玉吉……『大東亜戦争の体験』……………	33
●谷口	初榮……『父は北千島の海の底』……………	35
●大須賀	迪子……『私たちは戦犯(？) ^{なの} 』……………	37
●山西	哲也……『日本最年少の軍人でありし吾』……………	41
●椎名	康夫……『灯火管制の闇の中で』……………	43
●廣澤	フサ子……『戦争を語る最後の年代の一人として』……………	47
●杉江	ヨシエ……『手作りの教科書』……………	49
●中山	正子……『祖母の手紙』……………	53
●鈴木	顯介……『なぜ10万人の同胞は焼き殺されねばならなかったのか』 東京大空襲考……………	57
●宗	昌枝……『我が家に焼夷弾が落ちた!』……………	61

❖ 渡邊俊治 わたなべしゅんじ

『戦争体験談』

Ⅰ、学童集団疎開

昭和19年、戦争が激しくなり、首都東京も敵機の来襲が懸念され、学童を戦火から守ることと防衛の足手まといを排除するなどから、学童集団疎開が行われた。我が町の学童は栃木県菊沢村（現鹿沼市）の天理教教会にお世話になった。疎開先では、6年生の私はリーダー役ないしは指導教員の補助役を担い、例えば寝小便の癖のある下級生を夜中に起こし便所へ誘導する等を務めた。

学業は土地の小学校に編入され、地元の児童と机を並べて学んだ。上級生は農業実習もあり稲刈りを行った。稲の根元を左手で握り、右手に持った稲刈り鎌で刈るのだが、私は左手中指を切り化膿させてしま

い痛みに耐えるのが辛かった。

雪が降った冬の朝、小学校では暖房もなく、地元の子供達も寒がっている。校庭で雪合戦をさせられ先生の激しい掛け声の下で、手がかじかむし足元はぬれる。泣き出したくなる思いだったが歯を食いしばった。

2、戦災に遭う

昭和20年3月初旬、6年生は卒業のため集団疎開から東京へ戻った。3月10日深夜、東京の下町は米軍の無差別爆撃に遭い、甚大な被害を被った。この影響で小学校の卒業式はなく卒業証書の交付もなかった。

4月13日、漸く中学校ようやの入学式があったが、その夜の空襲で我が家は罹災した。激しい焼夷弾の雨、居間の床下にある手作りの防空壕に籠っていたが、近所からの「はやく逃げろ」の声に、家族共々飛び出した。家の前の道路はすでに避難する人々で一杯、皆が行く列に入って火の粉を防ぐために防空頭巾の上から水を被りながら逃げた。

空襲も収まり、夜も白々と明けてくる気配に何とか逃れた安堵感。平素から周知されていた避難場所である我が母校の小学校へ行ったが、母校は焼けただれていた。

全く偶然に母校の近くで母に会え、ともに安堵した。母は父と兄の位牌及び醤油の入った一升瓶一本を大事に抱えていた。今にして思えばたかが醤油だが、当時は生活必需品として配給された大事な物資だったのである。

2日後の4月15日にも空襲があったので、母の郷里である埼玉県へ避難した。

数日後、入学式だけ在学习上した中学校から埼玉県立中学校への転校手続きをするために、飯田橋駅へ向かって土手公園を歩いていたところ突如、米軍艦載機が飛来し機銃掃射をしてくる。慌てて道路脇の側溝に飛び込んで難を逃れたが薄氷を踏む思いであった。

埼玉県立中学校へ転校すると教科書とともに軍靴が配給された。足のサイズに合わなかったが教員から「贅沢を言うな、足を靴に合わせるのだ!」とどやされた。

◆ 三浦秀夫 みうらひでお

『私の戦争体験』

私は昭和12年9月愛知県渥美郡二川町で生まれた。東海道五十三次「二川宿」の町である。町内には往事の旅籠が現存していた。この年に支那事変が勃発して日本は戦争への歩みを加速して行く。隣接する豊橋市には陸軍の師団が設置され、50万坪の敷地には一万人以上の軍人が駐屯していた。私の幼稚園時代には、この中にある陸軍病院（支那事変の負傷兵が入院していた）にお見舞に行き、子供相撲などを披露した。昭和16年12月には、日本の海軍がハワイの真珠湾を奇襲する事によって太平洋戦争が勃発した。幼稚園では毎朝の朝礼で園長先生から、マニラ占領等戦果の発表に沸いた。しかし、私が小学校に入学すると様子が一変した。ラジオのニュースでは戦果の発表が無くなり、転戦即ち退却が多くなった。私の町で

も空襲警報が頻発した。アメリカ空軍のB29爆撃機の編隊が毎日上空に飛来した。さらさら輝き飛行機雲をなびかせる姿は敵ながら綺麗だった。当時はどこの家も地下に防空壕があり、空襲警報の度にこの中に避難した。日本軍は高射砲から敵機に発砲したが敵機には届かなかった。昭和19年には隣接の豊橋市街がB29の大編隊によって焼夷弾を投下され、夜の空が昼の如く明るくなり、私は防空壕の中で震えていた。私の二川町は太平洋に近かったので、アメリカの航空母艦から飛立った戦闘機の奇襲を受けた。近くを通る東海道本線の列車が主なる標的となったが、動くものは何でも狙撃され、小学校の登下校には危険が伴った。神の国である日本は最後には必ず勝つ、それ迄我慢しろと言われ続けたが期待は裏切られた。そして敗戦、生命の危険が無くなり全員が安堵した。食糧難の時代が長く続いたが何とか耐え忍んで全員が復興に励んだ。客観的に日本の国力を考えれば、世界中を相手に戦争を仕掛けるのは狂気の沙汰であったが不幸にも実行されてしまった。残念ながら歴史上の事実である。

❖ 鈴木和夫 すずきかずお

『沢井の軍需工場』

このつつじの里の鈴木家の佇まいは、明治から昭和三年頃にかけて養蚕業を目的として

建てられたものです。然しながら支那事変（昭和十二年七月七日）勃発、太平洋戦（昭和十六年十二月八日）勃発など時局の急激な変化により養蚕業はアツという間に衰退の一途をたどりしました。それからいうもの昭和十九年米軍の本土爆撃も烈しさを増しこの年十月当時、青梅線の東中神駅北にあった陸軍航空工廠が吉野の大房さんを通じて「一部を工場疎開したい」との申し入れがあり、父は即、受け入れたのです。早速年末より工作隊が入り床を取り払って改造、変電設備や工作台、コンプレッサーなど機具機材が搬入され、昭和二十年になってから翼と補助翼の生産が始まり鋸打ちの音、コンプレッサーの音がこの地

にこだしました。工場長は航空技術将校延藤中尉、検査官の技術将校大賀少尉、以下男子軍属二十余名、女子挺身隊二十名、学徒動員東京都立第二中学校（現都立立川高校）より三年生約250名中約150名（三クラス）「旧制中学校の題⁴期生」で引率は近藤先生と高須先生でした。制作は戦闘機の翼及び補助翼キー⁹3、キー⁸7のように記憶している。

機名は軍の機密で定かでなく、資材の搬入、製品の納入はすべて軍用トラックが行った。当事B29の空襲も益々頻繁になり持久戦が想定され、従事者の自給自足をも考慮し乳牛の飼育や農作業も行った。又、軍属達は夜間、沢井小学校校庭に於いて銃剣術訓練もした。その頃の通勤学徒はまだ藤野駅からのトンネルが未完成で藤野峠を軍歌を歌いながら山越えたものです。が、それは二十年八月十五日の玉音放送を以って幕が引かれました。わずか十ヶ月の軍需工場でした。父、茂虎は「戦争に敗れた。もう保障も何もいらない、一時も早く撤収して欲しい」と言った。でも二ヶ月かかった。その跡は文字通りの故郷の廃家となった。因みに全く偶然にもこの学徒の中に私、鈴木和夫がいたのです。不思議な縁です。

◆ 宮部 栄子 みやべ えいこ

（母栄子の日記から息子、宮部安男が抜粋）

『焦土に立つ』

昭和二十年四月十三日、母栄子が二度にわたる空襲により、罹災（本郷方町と高円寺）

1、B29による焼夷弾攻撃

夢の中で聞き覚えのある音をとらえ次第に現実の大きな音響となってポツと目がさめた。

私の頭から爪先まで警戒警報のブザー音が満ちていた。いよいよ三月十日の二の舞か。急いで防空壕に荷物を運び込む。退避を指示する半鐘の音がけたたましい。近所の人達も壕に入らず空を見上げ、「来た来た」

と大声。ゴーと響くB29の音の後から一面焼夷弾による火花が散る。B29は地獄の使いではなくて何であろうか。通り魔のごとく急降下。ワーツと耳鳴りがして落下音に魂も消し飛ぶかと驚く。パツと上が

る火柱。後樂園方向だ。三河屋の裏手に白光の如き火柱が立った。

2、自宅が消失して茫然自失

本郷の方町の一帯はすっかり焼け落ちて、道には電線が縦横に乱れ、火がチロチロと地面をなめている。私の家の壕は大丈夫か。あわてて盛ってあった土をかき分けると、中の蓋がすっかり焼けて煙が立っている。辛うじて食糧・ミシン・道具類は助かった。衣類は大半がダメ。周囲の火気は次第に収まり、白々と夜が明けてきた。

3、人の親切・ぬくもり

せつせと自宅の壕の中のを掘り出していると、頭上から「栄子さん」と声がする。ひょっと見上げると千葉香取在住の（親せき）正雄さんだ。「あら正雄さん」罹災第一番で遠くから歩いてかけつけてくださった方の顔をみつめて、ただ涙が先に立ってしまった。

本郷の家の焼跡に立っていると次から次へとなすべきことが襲ってきて、夫が応召してから一人という覚悟がひしひしとこたえる。

・ 思い出は盡きず残れりこの家の 焼跡に来て灰を掬ひぬ

・ 君が住む島（激戦地マニラ）をも敵に侵さると 知れど すべなし寒い朝

この後、引越した高円寺でも罹災。自宅焼失。

母は、戦後約50年間日野に在住して、数年前に満百歳で大往生。

◆ 鈴木 順子 すずき よりこ

『昭和20年の記憶』

昭和20年の夏、警報も解除された真青な空、どこまでも青く雲一つない空に音もなく飛行機が立川方面に飛んでいる。銀色の大きな機体はB29だと分った。その時突然現れた小さな飛行機がB29の機体の左側後方に体当たりした。子供だった私にもそれが日本の飛行機で特攻隊だと分かった。飛行機は一瞬にして、黒い煙を上げ落下していった。あのもくもくとした黒い煙は今も目に残っている。怖いとか悲しいという感情はなく一つのシーンとして今も青い空に残っている。小さな日本の飛行機の中には兵隊さんが居たのだと思った気がする。しばらくして河原にアメリカ兵が落ちたと騒いでいるので私は見にいった。

しばらく行くと河原の茂みの中に本当にアメリカ兵が落ちていた。私は若いアメリカ兵だと思った。周りに大人や子供が囲みその死んだ若い兵隊に向って小石を投げていた。私は何も感じず見ていた。誰からともなく警察が来ると言い出し、その場を離れた。76年経った今もあの雲一つないマ青な空に銀色のB2 9、それに向って突進した小さく丸こい飛行機と黒煙を忘れることが出来ない。それに対して何の感情も湧かなかったことが今は不思議だ。戦争の悲しさは、それかもしれない！

私は東京大空襲も日野の万願寺から見た。真赤な空に雨の様に降る火のスジ。そして真赤な色が下から起こっているのを見た。父が今大変な事が起こっているのだよと言ったのを覚えている。東京大空襲です。日野万願寺の土手に近い我が家から見えたのです。

国民学校五年生、十才の記憶です。

戦争は人の心を失ってしまいます！！

な か お ら す み こ
❖ 中 村 壽 美 子

『戦中戦後の私』

国民学校入学の時、空襲警報が鳴ったら、近くの防空壕へ入れてもらう。無かったら側溝へ入り伏せをする。今の交通ルールの様に教えられました。疎開先は家族と静岡県富士宮でした。

”勝って来るぞと勇ましく…小旗を振って大通りに並び出征兵士を送り、同じ道で遺骨の迎えもしました。毎晩空襲で防空壕の中で過ごしました。工業地帯の方へ行くB29が落す照明弾が昼の様に照らし、その後爆弾の音が聞えました。

八月十五日、ラジオの有る家の前に大勢集まり、大人達が皆泣いてました。国民学校三年生の私には何

のことが理解出来ず、戦争が終った“と云われても解りませんでした。でもその夜電灯を被っていた黒い布が取れ、まぶしい夜がやって来しました。

私にとっての苦しみは、東京へ戻っての食糧難です。府中小学校五年生でした。さつまいも一切れの弁当も持って行けず、昼食時には校庭に出て皆の食べ終るのを待つてました。同じ様な子が何人も居ました。後年ユニセフの脱脂粉乳がまづかった。と云う同世代の話に、地域差も有ったのか一度も口にした事が無く、あの時代の私の口にもまづいと云う味覚が有ったか？今でも思われます。食べられる野草は何んでも雑炊になりました。春先草むらに生える“つばな”を見ると、その若芽の芯を食べたこと。味もそつけも無かったが噛んでいると柔かいので無くなっていった。口に入れば何んでも良かったのです。

国民学校三年生だった私も八十五才になります。国同士、主義主張むずかしい事が沢山有ると思います。どんな言い訳をしても戦争だけは決して踏み込んではいけない道です。

親も家も無くした大勢の戦争孤児達は、どうやって大人になったのか？

経験した人、語り継ぐ人が居なくなる。

戦争を知らない世代——何んと幸せなことか。

平和が続くことを祈って

❖ 町田典子 まちだのりこ

『私は忘れない』

あの戦争がなかったらと、どれ程の人が思ったことだろう。

戦後七十六年悲惨な戦争を語る人も少なくなってきた。時代は昭和から平成、令和と続き悲しいことに今でも世界のどこかで戦火は堪えない。昭和二十一年晩秋私達一家は着の身着のまま祖国佐世保港に到りつく。引揚げ船

興安丸には3000人以上の邦人で溢れていた。十分な食料もなくさつまいものつるを海水で煮たものとわずかなカンパンだけである幼い子、年寄りの命が毎日のように船内から消えた。遺体を内地まで連れてゆくことが許されず、興安丸は一時停留し小さなボートに移され沖の方に捨てられた。泣き叫ぶ遺族の姿

は今でも目に焼きついて八月十五日が近づくとトラウマの様に夢に出る。途中で死んでもいいと九才の私と四才の弟、一才の妹を連れて帰ってくれた父も母も今は亡く、あの悲惨な体験を語れるのは私一人となった。

330万人を超える尊い命が戦火に散り、辛酸な戦争体験を余儀なくされた多くの人を忘れてはならない。私にとって昭和二十年八月十五日は遠くて近い。命があつての平和で幸福であり、生命の大切さを実感する。

幸にして私達親子はその後父の実家である埼玉県広田村に居候となる。ハダカー一貫の私達は当然招かれざる客であつた。軍人であつた父は敗戦の喪失から立ち上がり生きるために家族を守るために、ブローカーのような仕事をしていたが昭和二十四年日野市日野台に小さな家を構え家族を支えてくれた。決して諦めてはいけない！と教えてくれた父、強さと優しさを教えてくれた母の愛はその後の私の人生の指標となった。赤い夕日の大地に置き去りにされた子供達、ソ連兵の侵攻で命を落した人を思う。平和の尊さ、命の重みを次世代に伝えていかねばならない。今世界中が新型コロナウイルスという未知のウイルス感染が拡

大し戦後最大の試練とも云えるが、私はあの体験があるから乗り切れる。

◆ 田中貞子 たなかさだこ

『戦時中、私は五校の小学校を体験した』

静岡市が空襲された時、広い家には小五の私しかいなかった。住んでいた静岡市鷹匠町は駿府城の東南、敷地内に湧水の池、台所にも湧水が溢れ、庭には蜜柑が実る家だった。

母と妹や弟は父の田舎の福井に疎開し、長兄は海兵、次兄は陸軍幼年学校、父はいつも、仕事で不在だった。私がひとりで、どんな暮らしをして通学していたのか、もう、思い出せない。とにかく、燃えさかる炎の中、黒焦げの死体につまづき、ころげながら、私はひたすら逃げまどった。

朝ぼらけの光の中、時折、火の手が上る自宅跡に立ちすくんでいる男がいた。私にひと言、「生きていた

のか!!」と。父だった。

昭和20年6月19日、夜11時過ぎから、静岡市はB29による空襲により、廃墟の街と化した。私はすぐ、福井の母達と合流し、その小学校で、疎開っ子といじめられ、八月十五日を迎えた。雪の降る前に、静岡の焼き跡のバラックに、全員で戻った。

昭和十六年開戦の時、私は板橋区で小二だった。小砂利を敷きつめた校庭を毎朝、素足で走らされ、恐い退役将校がサーベルを手にして立っていた。冬には霜焼の足が痛んだ。

小四の時、学校で集団疎開するか、家族で疎開するか迫られて、私達は、静岡市と清水市の中間にある有度村に家族で疎開し、父が当時、出向していた会社の社宅に入居した。私は有度小に転校した。三学期には、静岡市の広い社宅に移り、転校した。そこで空襲に遭ったのだった。

戦後早々の焼跡のバラック暮らしは苛酷なものだった。超インフレと食糧難に翻弄された。野草の中に米粒が浮ぶ雑炊、学用品を入れた木箱（机になる）を抱えての二部授業の青空教室。私は通学用の運動靴を買ってもらえず、下駄履きが恥かしかった。年少の弟や妹、病弱の母、私達は、何はともあれ、温暖な

静岡での日々に助けられ、何とか生き延びた。後で調べてみたら、昔食べた雑草は、ヒメジオンとスベリヒユだった。

◆ 上原久巳 うえはらひさみ

『百年後のあなたに！』

百年後の人にも知って欲しい私が語る戦争時体験です。

『ピカー』『ドーン』『ぶあー』これは長崎から十数キロ離れた川で泳いでいたら私が十歳の時の長崎原爆の状況でした。

最初の『ピカー』の時、周囲が黄色くなって見えました。『ドーン』の時は天空がドーンと鳴ったのです。

「ふあー」と超台風並みの風が吹き去りました。長崎の空を見たら最初真暗くなりました。それは一瞬にして地上のものが焼けて上空に舞い上がったのです。次は一転変化して真赤な空になった長崎でした。

地上のものが燃えて天空に舞い上がったのです。夕方長崎の方から大八車で逃げてくる人々がいました。

衣類は焼けただれ体にくっついていていただけでした。大八車についている輪の鉄は無く飛行機を製造する為にみんな供出したのです。「水」を飲ませて下さいとかぼそい声が耳にやきついていきます。飲ませて上げるとほとんどの人が亡くなったのです。

食べ物が無くて「かぼちゃ」「さつまいも」などです。学校に行く時は「ぞうり」をはいて行きました。素足の子もいました。校舎の天井はすべてはずされました。しゅうい弾が落ちて地上にくるためです。全校生徒で松の木に「キズ」をつけ「かん」に松ヤニを取りました。飛行機の燃料にしたのです。兄はニューギニアに行き、体中に破へんを受け最後の救護船で引き上げました。自宅で三年間位マラリアの高熱で苦しんでいました。私のすぐ上の姉は朝鮮に准看護士で行きましたが帰国する時は男装で逃げまわったとのことです。ひょっこり帰った時父の涙は初めて見ました。

百年後のあなたにもこれらの事を知っていて欲しいと思います。そして戦争の無い明るい平和がつづく事を願っています。

◆ 久保田晴子 くぼ た は る こ

『戦争と地震』

昭和9年5月3日生 1934年

蒲田区糀谷町2-1617番地 今の大田区です。今だに住所忘れません。

糀谷国民学校入学

3年生の時学童疎開に、1、2、3年生は行く事になりました（田舎のない人達）。静岡県袋井です。宿舎は、天理教。一ヶ月に一度、袋井の家族家庭へおよばれがありました。御馳走になりました。とても美味かったです。疎開の子供達の教室は、木造の平家建て3人がけ長机での勉強です。午後の授業 理科の実験で、デンプン作りの時地震があり、机の下にもぐりなさいと聞いた子供は、私のようにたすかりまし

た。生徒は、全員校舎の下敷になり、太い木が身体にさわり、土がガサガサ落ちて来て、皆が大声でたずけてと泣きました。袋井の村の人達が「のこぎり」で切り、助け出してもらいました。夕方でした。体はぐらぐらゆれてました。

東海道線は、不通で何日もかけて、父が迎えに来てくれました。その時の地震は、戦争がはげしくなり、ラジオの報道を規制されて、知る事が出来ませんでした。疎開した時は、蒲田糺谷町でしたが、その家は強制的に倒されて（ロープでたおす）いました。

私が帰った家は、鶴見の「総持寺」の山の中腹でした。（大きなお寺さんです）鶴見の山の傾面に住んでから戦争が激しくB29の飛行キが連隊で「シヨイダン」を空から降らし、下の家は火事になり、恐ろしい状況でした。サイレンが鳴ると、家の電気には、風呂敷でおおい暗くする。山の所どころに防空ゴウを掘られ私の母は絶対に入れなかった。その中へ避難した方々は、飛行キが落ち、亡くなりました。東京の空も夜なのに明るく、戦争が激しくなり、田舎のない私達家族は、父の戦友の家に疎開させてもらいました。埼玉県鴻ノ巣です。馬小屋の二階へ住まわせてもらいました。田園が広がり、レンゲの花が一面に咲

き、空襲がなければ、いい所でした。畑へ出た方は、”キジユウソウシヤ”でうたれて亡くなりました。

鴻巣で終戦を迎えました。3、4、5、6年7月まで、学校の勉強はしませんでした。

6年生の夏休みが終り、小平の天神町へ、父がバラックの家を建て家族父、母、姉、私、妹、弟6人が暮らし始めました。今でも市のサイレンが鳴ると、食が進みません。それと、小さな揺れでも地震と感じます。

なかむらたまきち

◆ 中村玉吉

『大東亜戦争の体験』

一九三〇年五月、新潟の現在の上越市の山奥に農家の次男として生まれ、戦争が始まったのは小学校四年生の十六年十二月八日でした。貧しい農家の為め、八人兄弟の次男でしたから兄のお下がりばかり着て学校に通いカバンは風呂敷で靴は帯靴でした。戦争が始まった頃はラジオは部落に一台か二台しかなく人づてに聞くしかなかった時代でした。最初の一年は連戦連勝で日本中が湧き提灯行列などやり雪深い中を皆で歩いたが一年もしない内に形勢があやしくなり日本兵が戦死したりとの報が入って来ました。昔は徴兵検査が有り男は二二才になると必ず兵隊に行く義務が有りましたので、学校高学年になると出征兵士の家に勤労奉仕に行ったり、女子は子守りに駆り出され勉強どころではなくなりました。我々高等科二年生に

なると志願兵をとる事になって来て自分は勉強は出来なかったが体格は人一倍良かったので甲種合格となり二〇年の高等二年卒業手前の二月戦争に駆り出され雪深い寒い中村人や同級生に見送られ吹雪の中を四〇kmも父と一緒に歩き直江津の駅迄歩きそこで憲兵に連れられ着いた所は、神奈川県久里浜でした。でも戦争に負けると分かっていたのか訓練などしないで毎日防空壕掘りをやらされた。その内にB二十九と云う爆撃機が頭の上を通過して東京の大空襲が始まり自分達はそれを遠くから眺めて居るだけでした。何しろ武器も無ければ火を消すバケツもなし。

ただ逃げまどうばかりです。幸か不幸か自分達は焼け野原で昼は防空壕にかくれ夜になると食料を探して歩き廻り、食べ物を暗やみの中で手当たり次第口に入れました。昼間は敵の飛行機が人影を見ると撃たれるので防空壕にかくれ、毎日早く戦争が終わらないか自分も殺されるか子供心になったが八月十五日の天皇陛下のお言葉を聞いた時はこれで命だけは助かったが兵隊さんの幹部は我先にと姿を消し我々少年兵はとまどい、どうしたら横浜から生まれ故郷に帰れるのか必死に考えとにかく汽車につかまりやっと帰った。

❖ 谷口初榮 たにぐちはつえ

『父は北千島の海底』

昭和十九年五月、三十四才の父に「赤紙」がきた。

一番電車に乗って行く父を見送った母が、部屋の片隅で前掛けで顔を覆って泣いていたのを覚えている。

七才の私と妹二人、生後四ヶ月の弟と母が残された。

母は毎朝父の茶碗にご飯をよそって陰膳を据えた。

学校では習字の時間に「テキウテ」と書き、玄関に貼らされた。翌二十年父が千島列島に転属になる。

船は出て行く北方へ

可愛い坊やの打ち振る帽子

涙隠して心で泣いて

両手合わせてさようなら

父の上官の作だそうだが、正に自分のことを歌っているこの歌を父がどんな気持で歌って出航したのだろう。

戦争が終って毎日毎夜母と父の足音を待ったが、とうとう帰って来なかった。

二年後北千島にて戦死の公報に、母は又前掛を顔に当てておいおい泣いた。

❖ 大須賀迪子 おおすがみちこ

『私たちは戦犯（？）なの』

毎年夏を迎えると、私の胸は重くうずくのです。生涯忘れ得ぬ戦争の悲惨さを、わが手に記憶させてしまったからです。

「立川曙小学校の校庭に集まるように」とのおふれ（知らせ）がまわってきました。おふれは半強制力のある義務的なものなので、私は母と連れ立って向いました。一体何だろうな、校庭には、既に数百人の老若男女が列を作っていました。その列の先頭に目をやると、明らかに竹刀とわかる棒を握った男の人が向かっている先に、半裸体で後ろ手に縛られた人が頭をだらりと下げた後ろ姿が目に入りました。その傍らに日本の憲兵らしき軍服姿の人が「たたけ！」と叱声している様子が見えました。昨日、皇軍（日本軍

「天皇の軍隊の意」に撃墜された敵機の捕虜への憎悪をつのらせていたのです。替わる毎に憲兵は「強く！」とか「やれっ！」と声をかけていました。捕虜はうめくのみで、たたかれた跡から血が垂れ、赤くただれ傷ついた痛々しい姿をさらけ出すのみでした。戦争は、その残酷さや残虐さを戦争ということばですべて覆い隠してしまう。

私達の番になりました。母は「貫一を返せ！」と大声でとなりながら竹刀で思いっきりなぐりました。戦争への嫌悪がむき出しでした。貫一兄が出征する時は、決して見せなかった母の真情が、この時ほとばしったのです。

母心が胸を突きました。同時に眼前の捕虜にも母の愛がある悲しみがあると気づきました。私は竹刀で軽く捕虜の背をなでるように触れました。傷だらけ血だらけの背が眼に焼きつきました。「もっと強く！」
憲兵は私をにらみつけました。

戦後、憲兵は戦犯として処刑されたとか。その一部をになった私達はどのようなでしょう。

父はこの時、教え子に借りた畑に肥料の肥やしを運ぶ途中、校庭の状況を見、軽く会釈して立ち去った

と、後に、近所の人「やはり校長先生だ」と感じていたと知りました。

戦争は人の心を変えてしまうのです。

やまにしてつや
❖ 山西哲也

『日本最年少の軍人でありし吾』

私は一九三一年七月七日生まれで今年で丁度九〇才になりました。長い人生のうち戦争に直接関与したのは僅か十四年でしたが、戦争に骨のずいまで苦しめられ振り廻された一生という思いです。

当時一九三一年のことをイクサハジメと読む人もいましたが、この年に満州事変、昭和十二年に支那事変そして十六年に世界大戦と泥沼のなかに突入し二十年の原爆によって終止符をうつことになります。

私は終戦を十四才で迎へましたが、既に日本陸軍の将校生徒として正式に兵籍にありました。当時日本陸軍の幹部養成コースとしては、幼年学校——士官学校——陸軍大学校があつて、幹部は殆んどこのコースで学びました。幼年学校は当時中学二年（旧制）から受験しましたがごく例外的に一年からも受験できま

した。私は幸いにも一年から合格しましたので日本最年少の日本の軍人さんとなった次第です。

私の配属先は広島陸軍幼年学校でした。

八月六日の原爆は私の学校に直接落下し建物も人も一切影も形もなくなりました。幸いにも原爆落下の一ヶ月前に阿南陸軍大臣の命令で学校全体が庄原市に疎開し一命をとり止めることができました。

その後十日足らずで終戦となり故郷の香川県に帰ることになりました。私の戦争の本当の地獄の苦しみはここから始まりました。

私の両親は教職にあり軍人には関係ありませんでしたが、父は召集で兵隊にとられフィリピンであえなく戦死しました。残された母と十四才の私を長男とする幼な子五人お金もなく食べる物もなく地獄のなかをたださまようこととなりました。一番下の弟はそのなかで餓死同然に幼い命をなくしました。

あの頃の苦しさ悲しさを思ひ出すたび今でも身をを切られる辛い思ひになります。幸いその後夫々何とか生きてゆくことができてまづの終末を迎えることはたゞ感謝にたへないところであります。

最後に私として声を大にしてさげびたいのは「二度と戦争はしてはいけない」ということです。

❖ 椎^{しい}名^な康^{やす}夫^お

『灯火管制の闇の中で』

東京から会津を旅することになった時、「会津若松に会いたい人がいるの」と母、私が生まれる前に知り合った人だという。

終戦間際、母は父の転勤で会津に住んでいた。一九四五年五月、急用で東京の実家へ汽車で行くことになった母は、米軍の空襲によるダイヤの乱れから、新潟、長野を経由し東京へ向かった。夜になり松本付近で空襲警報、停車し明かりを消した真っ暗な車内に少年のような兵隊さんがいた。

小声で話す内、母が会津に住んでいることを知った兵隊さん、こっそり両親に宛てた手紙を母に託した。やがて会津に戻った母、託された手紙をご両親が住む農家に届けると、たいそう喜びお礼にと沢山の野菜

を下さったという。食糧難の時代だった。

十六歳で予科練として入隊したその兵隊さん、母に手紙を託した当時は十七歳、米軍の上陸に備え横須賀へ向かう途中だった。横須賀では鉛の履物に重い潜水服をまとい、先端に機雷を付けた竹竿を持って上陸する敵船を海底から爆破する突撃訓練をしていた。『伏龍隊』といい、訓練中に事故死した隊員もいたという。しかし敵が上陸する前に終戦、彼は生き残った。

会津に戻った彼は、名前も知らぬ母の行方を捜した。しかし、既に父の転勤で母は会津を去っていた。長い歳月が過ぎ、昔話の中で偶然母の消息を知る人と出会った彼は、上京の折東京のデパート屋上で母と再会、その後年賀状の遣り取りをしているという。

終戦から六十四年後の二〇〇九年夏、訪れた私たちを瘦身の丁さんは笑顔で迎え、母に手紙を託した件と横須賀での訓練の模様を記した手記のコピーを下さった。

その数年後彼の訃報が届き、二〇一九年には母も逝った。戦後生まれの私は父母から戦争の話を聞いたことがない。母のエピソードは、運命を翻弄する戦中も心を通わせ生きる人々の日常があったことを教え

てくれる。

❖ 廣澤フサ子 ひろさわふさこ

『戦争を語れる最後の年代の一人として』

今年もまた巡ってきた終戦記念日だ。七十六年前のこの日、私は小学一年生、疎開先の村の長の家に父母と行った。疎開先は神奈川県の中井村（現在は町）まだこの地に来て五日目のことである。玉音放送の意味は分からなかったが、女の人のみならず、男の人も手について泣き出した。その様子にとっても大切な放送だったんだなと思った。「さあ、今夜から電氣に布をかぶせなくてもいいんだよ。」父の言葉で戦争が終わったことを知った。

二学期になり学校が始まると、一年生の私達まで薄っぺらなわら半紙に印刷された教科書に墨を塗らされた。また通学途上で男子の上級生が「本人の自由、本人の言う通り」などと声高に話しているのをよく

耳にした。軍国主義から民主主義への転換が民衆に浸透してきたのだ。私は昭和二十年八月二日の八王子の空襲で家が焼かれてしまった。いつも空襲警報が出るとラジオ店の土間に掘った防空壕に入るのに、その夜は「ドーン」ととてもない音にはじかれたように家を出て浅川の河原に逃げた。一緒にいた叔母が私の防空頭布ずきんをザブツと防火水槽に入れてからかぶせてくれた。河原には何家族もの人々がかたまりになって避難していた。見わたせば夜空が三十六度まっ赤になっていた。それと同時に大人達が話していた言葉「焼夷弾ならば川の水で何とかなるが、爆弾だったら助からない。」

そんな恐ろしい夜でも子供の私は母がそばにいたので、よその人が貸して下さった布団で眠ってしまっただ。次の朝目覚めてびっくりした。一面の焼け野原、あちこちからくすぶった煙が上がっている。私の家族は焼失をまぬがれた親戚の家にお世話になり、十一日中井村にやって来たのだ。ラジオ店を営んでいた父母は農地解放で得た田畑を耕作していたが生活は困窮を極めまた八王子に戻った。もう少し早く戦争が終っていれば……私は中学を卒業した年で、高校入試に間に合わず定時制高校、短大の二部、通信で教師の道を歩んだ。

◆ 杉江ヨシエ すぎえよしえ

『手作りの教科書』

私が3歳のとき、戦地から帰った父が日立製作所に入社して満州で働くことになり、家族そろって満州の奉天に渡りました。暖かなペチカ。二重窓からは池とマロニエの並木が見え、街には広い道と華やかな商品が並ぶ大きなデパート。美しいところでした。90歳まで生きた母は、「満州時代が一番よかった」といっていました。

しかし、その幸せな生活は2年で終わりを迎えます。内地（日本）の情報がいち早く入る購買課で働く父が、「日本は戦争に負ける」といい、退職して内地に帰ることを決断。すしづめ状態の船で、途中、敵機にねらわれながらも無事内地にたどりつき、東京日野市に暮らしはじめました。

いよいよ東京も危ないと、今度は父の実家のある北海道へ引っ越し、そこで終戦を迎えました。「もう、これからずっと戦争がないからね」と父がいった時の情景は、今でも忘れることはありません。

あとになって、満州の遊び仲間誰も助からなかったと聞かされました。父の機転と運のよさから生き延びられました。両親には今も感謝しています。

終戦の翌年、北海道の小学校に入学。十一月、父の仕事の都合で神奈川県に引っ越ししました。転校生に教科書はありません。母は毎日のように、近くの友達の家から教科書を借りて来て夜遅くまで書き写し、私のために教科書を手作りしてくれました。

食べ物は、コッペパンや、進駐軍の大きなバケツのような入れ物に入ったシチューみたいなもの。母と行列を作ってとりに行きました。家にはお風呂が無く、行水か、町田のお風呂屋さんまで電車に乗って出かけました。ある日ドラムカンが家に運びこまれ、板を敷き、五衛門風呂ができました。ささやかな日常生活を、少しずつ、何年もかかってとり戻していきました。

戦争は自然を破壊し、人々を殺し、世界を荒れはてた恐怖の世界に変えてしまいます。もう誰もそのよ

うな思いをしてほしくない。国立市在住の小学6年生の孫が、私の思いを受け止め標語にしてくれました。

目を背けずに、過去を受け止めよう

そこから始まる 私達の未来

❖ なかやままさこ
中山正子

『祖母の手紙』

昨年11月 あとひと月で99才になったはずの祖母が戦争を経験し、私の母は戦争遺児であることは知っていた。が、祖母が書いた手紙を読んだ時、言葉が出てこなかった。それは一度ならず二度も戦争を経験するなど思いも及ばなかったから。その手紙とは

満州の兵隊さんへ

私は日の本の小学生でございます。

野原には身にしみる冬風が吹いてきました。山の木の葉もから／＼と落ち始めました。森にはからすが鳴いてゐます。学校には日の丸の旗がかがやいてゐます。兵隊さん満州は大そう寒いといふことを新聞や先生やお母さんにきいてをります。其の寒さにもかゝらず國のためにつくして下さるのですね。食事もうく／＼食べられづ着物もきられづ、雨のふる中でも戦つてゐるのでございますね。涙が流れます。

私は大きくなつてりっぱな兵隊さんにはなれませんからか／＼ふとなつて満州えでもどこえでも行き國のためにつくそうと思つてをります。どうか兵隊さんおからだを大切に國の為に私達小學生のために一心をなげうつてくださいね。お願い申します。兵隊さんの健康を神様に朝晩お祈申します。兵隊さんではさよなら。

寒い／＼満州で。

寒さしらずに。

御國の為につくしてくれる兵隊さん。

ほんとにありがたい／＼

日本國民萬／＼ざい。

神奈川県津久井郡与瀬町

桂北尋常高等小學校

四年生十一才

清水千賀子

この手紙には満州の兵隊さんから翌年の8月²⁴日に返信があった。戦況が深刻化していることがわかる、そして7年後、祖母は大東亜戦争で戦争未亡人となった。

年齢・国籍・人種にかかわらず戦争ゆえにうみ出される悲しい思い、決してそうした思いを経験することのないよう心から願います。

◆ 鈴木顯介 すずきけんすけ

『なぜ10万人の同胞は

焼き殺されねばならなかったのか』

東京大空襲考

昭和20年3月10日未明の東京大空襲の時、私は13歳。今の地下鉄大江戸線、清澄白河駅の真上に住んでいた。隅田川東岸沿いの大通りと清洲橋から東へ延びる大通りの交差点の北東角。東京進入口を示す初弾の炎は家から南南西へ250m余り風下に入った。

目標地域は隅田川と荒川に囲まれた隅田川東岸、今の江東、墨田区の全域と、西岸の今の台東、中央と

港区の一部など市街地の東半分。B29長距離爆撃機279機による初の夜間、低空、集束油脂焼夷弾による約2時間半のじゅうたん爆撃。木造住宅密集地帯の大火災で住民を残らず焼き殺すのが狙いだった。東京に始まり全国の都市を焦土とした爆撃を立案・実行した陸軍航空軍司令官ヘンリー・アーノルドは同年6月16日の日記に、日本人の蛮行への仕返しだとう記す。「ジャップを生かしておく気など全くない。ガスを使っても、火を使っても日本人という民族が完全に駆除されるのであれば、何を使ってもいいのだ」。

一家全滅を免れたのは、前年12月油脂焼夷弾で家を焼かれた級友の「飛び散った油脂は絶対消せない」の情報。これを聞いてすぐに、母は4歳と生後4か月の弟を連れ、父の郷里三浦半島に疎開した。

爆撃が終ったところ猛火が家に迫る。警防団長の父が「消せない。脱出だ!」。火炎烈風の火の粉が猛吹雪のように渦巻く十字路に人影はない。

「行くぞ!」父は右手に鳶口、私は左手にバック、右手で握った父の左手を離せば死。逆風を衝く生死を懸けた南西側への十字路斜断。ほど近い清澄庭園に逃げ込めた。

翌朝、大通りに出ると、誰もいなかった道を埋め尽くす黒い人型の塊。電柱を背に軍刀を杖に立ち、つぶやく陸軍将校。近づき風上側へ回ると、半身は炭だった。集めた黒い亡骸はみるみる山となる。暗紅の朝の陽が漂う空に満ちる生身を焼かれた人の臭い。

なぜ10万人の同胞は焼き殺されねばならなかったのか？呪いの炎は心に点り続け、問い続ける。

❖ 宗そう 昌まさ 枝え

『我が家に焼夷弾が落ちた！』

昭和15（1940）年3月、名古屋のど真ん中に生まれた私の幼少期は、戦争の真ただ中でした。空襲警報が発令され、母と私が防空壕に入っている時に、B29が落とした焼夷弾が、2階の屋根をつき抜け、1階の次兄が寝ていた布団から床下まで貫きました。

昭和6年生まれの次兄は、学徒勤労動員で早朝から三菱重工に働きに行っていて、難を逃れることができませんでした。近所の人たちが布団にあいた大きな穴を見にやって来られたことを、当時4、5歳だった私ははっきりと覚えています。

昭和20年3月12日夜の大空襲の時、はしかに罹って熱を出して寝ていた私を、母は乳母車にのせて、

水でぬらした布団を上から掛けて逃げてくれました。息苦しくなって時々布団を持ち上げると、火が燃えている中を人々が右往左往、中には衣服に火がついた人が何か叫んでいる姿が見えました。空からは絶え間なく火の粉が降ってくるので、一刻も早く安全な所に逃げなければならなくて、誰も他人のことなどかまっておれません。

翌朝、我が家の焼け跡に戻りましたら、消火活動に追われていた父や次兄も戻ってきました。焼け跡のあちらこちらで、まだ弱い煙が立ち上がっていました。母が翌朝のためにおくどさん（かまど）にかけていたお釜のご飯が、空襲による火事の熱で炊けていました。厚い木のふたは燃えてしまい、お釜も上の方は溶けていました。母がおにぎりをこしらえて、みんなで食べられたことは不幸中の幸いでした。

近年、憲法9条が問題になっています。大勢の人たちの尊い犠牲により生まれた憲法です。みんな真剣に考えなくてはと思います。

日野市・国立市・多摩市 3市連携

戦争体験アーカイブ事業

●募集内容

戦争の恐ろしさ、平和の大切さを次世代に伝えていくため、戦争体験をアーカイブ（記録・保存）し、平和事業に活用する。

●募集テーマ

「次世代に伝えたいあなたの戦争体験」

●募集期間

令和3年6月1日～8月31日必着

●募集対象者

- ・3市（東京都日野市・国立市・多摩市）在住者または3市にゆかりのある方
- ・3市（東京都日野市・国立市・多摩市）在住者または3市にゆかりのある方からきいた戦争体験を証言できる方（ご家族など）

●募集詳細

1. あなたの戦争体験を800文字以内で原稿用紙にまとめ、郵送・メールなどでお送りください。ご持参も可能です。
2. 裏面の原稿用紙をご使用ください。必要事項はもれなくご記

入ください。

●応募得点

- ・応募者先着100名…選考委員長の著作絵本

●選考について

- ・下記の方々に約30名分を選んていただきます。

選考委員長…林家木久扇氏（落語家）

選考委員…コシノヒロコ氏（ファッションデザイナー）・丘修三氏（児童文学作家）・加藤登紀子氏（歌手）・中満泉氏（国連事務次長・軍縮担当上級代表）・稲葉茂勝氏（子ども大学に

たち理事長）

●注意事項

- ・氏名はペンネーム、匿名は避け、ご本名としてください。
- ・体験内容は未発表のものに限ります。応募用紙は返却いたしません。
- ・応募作品のすべての著作権（著作権法第17条1項に規定する著作権をいい、同法27条及び第28条に規定する権利を含む）および応募作品にかかる知的財産権、その他一切の権利は、市（日野市、国立市、多摩市）に帰属します。
- ・採用された体験文等については、市主催の平和事業などで使用場合があります。
- ・個人情報については、本事業以外の目的で使用することは一切ございません。パネルおよび冊子作成の際には、「氏名」・「年齢」・「各市との関係」を表示します。

実施経過

2020年12月 日野市・国立市・多摩市が連携して動き出す

2021年5月 選考対象・方法、選考委員を検討・決定／記者発表

6月 応募要項および募集チラシを配布 募集開始

8月 31日、募集締切り。70編の戦争体験談が寄せられる

9月 選考開始

10月 先行者発表・連絡

11月 選考者による体験文の朗読音声を収録

12月 12日、記念イベントおよび音声パネル展開催

12月 2022年1月 各市にて音声パネル展開催

2022年1月 「音声パネル」および小冊子（3市選考者）完成

2022年3月 日野市小冊子

「次世代に伝えたいあなたの戦争体験」 完成

日野市核兵器廃絶・平和都市宣言

昭和 57 年 10 月 8 日

議 決

巨大な量の核兵器は、米ソ両国の戦略兵器制限交渉などをもつてしても、もはやその拡大を止められない事態となつている。

ひとたび核兵器が使用されることになれば、その結果は全人類とその文明の滅亡であることはいうまでもない。

日野市は、核兵器が地球上から姿を消す日まで、その廃絶を叫び、平和が市民生活の基本であるとの理念のもとに、ここに日野市が核兵器廃絶・平和都市であることを宣言する。



戦争体験アーカイブ事業 「次世代に伝えたいあなたの戦争体験」
令和四年三月発行

編集・発行 日野市企画部平和と人権課

TEL 911-0062

東京都日野市多摩平2丁目9番地

多摩平の森ふれあい館

電話 042(584)2733

FAX 042(584)2748

